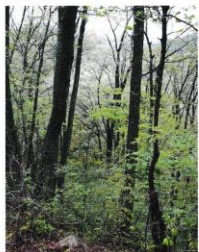


# 自然と関わった人々の生活

座光寺は南本城や小学校の南側斜面で上の段と下の段に大きく分かれています。上下を隔てる断崖には山林があります。また宮崎や原集落の上に広がる大門原の果樹園地帯の西部は山林が広がっています。これらの山林は昔から地域の人々の生活に大きく関わっていました。このような山を一般に「里山」と呼び、座光寺では「入山」としていました。昔の里人の生活と里山との関わりを探りましょう。

## 里山とどんな関わりをもっていた？

小学校下の断崖山はほとんどが個人所有で、区有林は麻績神社の裏にわずかにあるだけです。それに対して大門原の上の山は



里山の春  
高木のコナラ・クスギ・カスミザクラ、低木のナツハゼ、ミヤマギマズミなどが生える雑木林。

ほとんどが区有林です。区有林は入山(村有林、現在は財産区林)と呼ばれる入会権のある山でした。入会権とは地区の人たちが利用できる権利があるところで

す。里の人にとって区有林、個人所有林を問わず山は自由に入っても良い所でした。人々は草を刈っては畑の肥

料にしたり、木を切って焚き木にしました。この中のどれもが里の人々の生活に欠かせないものでした。

## 山のきまり

山には地区の人が自由に入りましたが、暗黙のきまりがありました。個人所有の山を呑めて、どこかの山でも枯れて落ちた枝葉や灌木は自由に採っても良いのでした。ただのこぎりを使って樹木を切ることは許されませんでした。これは山の持ち主だけができるのです。

## 里の柴刈り

草や低木は刈って畑に敷いて乾燥を防いだり肥料にし、枝は焚き木としました。この山の草木を採ることを柴刈りといいました。ただ座光寺は山懐が浅く、入山が少ない村でした。そのため隣村、特に牛牧とはしばしば山のことでも争いがありました。

焚き木は大きく2種類に分けられます。スギやマツの

認たというわけです。それだけ、山が重要だったのですね。

**村の新聞**

座光寺村誌15号

歴史的村民大會  
治山の方針遂に成る

街園地金庫結果

村の新聞

治山の方針遂に成る

入山は村の大問題であった。当時のことを伝える公民館報(昭和24年4月1日)

落ち葉は炊きつけに使い「もや」と呼ばれました。やや太い枝は薪と同じように焚き木に使われました。松の葉は「ご」、枝を「あかし」といい、ごは焚きつけ、あかしは燃えがいのので、かまどに先に入れました。

農閑期には皆が山に入り、一年中の焚き木を集めました。これは女子供の仕事で「冬支度」と言いました。

昭和20年代山に入った南市場の中山功治さん(76才)は「舗装が無く、石がごろごろした山道を六八車を引くことは大変な難業であった」と言っています。

下段の中羽場などの人は天竜川で川木(流木)拾いをしてたぎぎをとることもありました。

## 山菜を採る

昔からワラビ、ゼンマイ、タラノキなどの山菜を食べる習慣はありましたが、人々はそれほど山菜にこだわってはいませんでした。山菜の季節は農作業が忙しい時期です。昭和30年代までは生活がそれほど豊かではありませんでしたから、現金収入にはならない山菜をとることにエネルギーをかけませんでした。

座光寺の人たちが山菜をよく採るようになったのは昭和30年代の高度経済成長を経てからでした。生活に余裕ができてから盛んになったのです。またごごみ(クサツテツ)、みずな(ウワバミソウ)、コンアブラを採るようになったのは昭和40年以後でした。

秋のきのこも里人は採りましたが、生活のためというよりは、生活の余裕で採ったといえるようなものでした。ただマツタケのような高級なきのこは採って売ることもあったようです。きのこでもだれもが自由に採れました。近年になってからは財産区が入山料を取って、きのこの採取を認めるようになりましたが、2年前からは入山料は廃止しました。



新しい道路が里山を貫く。

## 現在の里山

地域の人々が里山を使用しなくなったのは昭和30年代からといわれています。この頃、家庭のエネルギーが灯油、プロパンガスや電気へと変化しました。台所で薪を使わなくなり、しばらくして風呂へと進みました。この変化はそれぞれの家庭の事情によって幅がありましたが、およそ30年ぐらいかかっています。風呂については果樹園等の整木、剪定、廃園などによって廃木がでるために、今でも薪を使っている家庭があります。畑の肥料も山の柴を使わなくても稲わらや化学肥料を使うようになりました。

このような生活の変化に伴って、里山の草木は使われなくなり、手入れもされなくなりました。そのために「山が荒れた」状態になりました。

山からマツタケなどが採れなくなったのは、山の柴を採らないために、低木が繁り、落ち葉がたまって土が富栄養化したためだと言われています。

その一方、車が普及して、地区外の人から山菜を採りに山に入るようになりました。もちろん車の普及には生活が豊かになったことがあります。山菜ブームは生活の余裕や豊かな生活を求めてのことでした。

このような山菜採りやきのこ採りで山が荒らされるようになりました。

ササユリなどの美しく、希少な山草が採られたものこの頃でした。

この結果「地区外の人入山禁止」を財産区で打ち出すようになりました。またいつの間にか「どここの山も自由に入っても良い」という習慣が薄れてきました。また、薪炭用に伐採されなくなったクスギやコナラの



立ち入り禁止  
大門原の上、山の入り口の風景。(2008年6月14日)

通る道路に落ち葉、落枝、日陰などの悪影響を与えるようになってきています。

### 暴れた竹林



竹林が広がる  
南本城より西の沢せげん頭方面を望む。山の緑色の部分はモウソウチク (2006年12月)

### 山ノ神をまつ

昔の人々が山と深く関わっていたことを示すものが「山の神」です。山の恵みをいただくことに感謝したり、山仕事の無事を祈ったりするために入口に祠を



宮崎地区山ノ神例祭で祝詞をあげる。(2008年3月16日)

林が大きくなり、「山仕事のプロ」でなければ伐採できないほどの大きなものになってきました。さらに、付近を通る道路に落ち葉、落枝、日陰などの悪影響を与えるようになってきています。

田んぼのはぜ掛け棒・竹細工など農業資材に使い、竹の子などは食用にしていた。それが高度経済成長時代を通じてすっかり変化し、現在は食用の竹の子採りにわずか使われるだけになりました。

竹を使わなくなって、管理が行き届かなくなると、繁殖力の旺盛な竹林は周囲の山林、畑を侵食するようになり、新たな被害が出始めました。

タケは地下茎で周囲に進出し、竹の子で一気に入る樹木の上に出て、枝葉を広げます。そのため他の木はかなり高木でない限り光獲得競争に負けてしまうのです。竹林に面した畑では竹の地下茎の進入に悩まされています。道路沿いでは冬の雪が竹林に降ると、しなった竹に道路がふさがれます。ときには通行する人に雪が落ちてきます。

一度伐採しても地下茎が生きていますから、翌年には再び伸びてきます。こうして、各地で竹林との戦いが始っています。

一度伐採しても地下茎が生きていますから、翌年には再び伸びてきます。

こうして、各地で竹林との戦いが始っています。

つくって祀りました。これが山の神です。宮崎の三村巖雄さん(88才)は「猪山の山の神では例年3月15日に春期例祭を行った。山へ入るときは神様に頭を下げた」と言っています。



お神酒をいただく。(2008年3月16日)

### 新たな里山との関わり

利用されなくなった里山を再生し、新しい関係を探る動きが出てきています。

区有林は緑資源機構などが入って、植林を始めています。また、県は森林税を導入して、緑の山を再生しようとしています。

飯田市は市内の小学校ごとに学校の山「遊びの場」を



飯光寺小学校の「あそびの森」  
森の中ではブランコ、綱渡り、木登りなどの遊びができる。

### 豆知識

#### 水との戦い

最下段の河原から中河原(約1km)にかけては水田がありましたが、もともと湿地であったために深い湿田(沼田)でした。水田にウ

シが入っても腹がつくほどで、ウマは入れませんでした。この地域は江戸時代の「石川除」で南大島川や天竜川の水害からは、守られましたが、水はよく揃けなかったのです。

湿田には戦時中(昭和17から19年)に暗渠排水ができ、平成に入って構造改善が行われ、基盤整備ができました。水田にようやく大型機械が入るようになったのです。

### 天竜川面の耕地と生物



高岡佐野の森～白下の水田  
かつては湿田、沼地であった。



麻績振興会の「さくら植林」(2006年5月21日)

作りました。子どもたちに自然とふれ合う場をつくり、自然のもつ教育力を利用しようというものです。

自治会の特別委員会「麻績の里振興委員会」は南本城の旧庄、下草刈りなどの山林の手を入れを行い、遊歩道をつくって、案内板を設置しました。また希少種のササユリの保護活動も始めています。

(小林正明)

### 水生生物の宝庫

湿田やその周囲の水路はたくさんの生物が棲んでいました。竹でつくった「うけ」ではドジョウが多く

獲れたものです。シジミもたくさんいました。そのほかウナギ、エビ、ドジョウ、フナ、モロコ、ズボンガシ(ヨシノボリ?)、タニシなどが獲れました。これらは子供たちの遊びで獲ることもありましたが、獲ることが生活の一部となっていました。証言によると「すて針でひと朝にウナギを6本も獲たことがある」といいます。家で食べることもありましたが、如来寺～元善光寺駅の間にあった小料理屋などにもって行って、買ってもらうこともありました。

(「座光寺の民俗」より)